

卷 頭 言

『エクス 言語文化論集』創刊に寄せて

戦後の大学教育の特徴である一般教養教育と専門教育との峻別に基づく教育体制は、文部省の大綱化実施以降、国立大学に代表される教養部の解体を含む多くの改革によって変化しつつあり、その峻別から生まれた弊害は少しずつとはいえ解消されつつあります。例えば、一般教養教育担当教員と専門教育担当教員との間の格差は、教育条件、研究条件、さらには労働条件の点でも大きく、その格差の解消は本学でも永年にわたる課題でした。教養部をもたず、一般教育科目中キリスト教科目および言語教育科目の担当者が基本的には学部には属していた関西学院大学でも、同じ様な問題が見られました。

このような中で近年進められた本学における改善の動きは、教育条件、労働条件に加えて研究条件へも広がりました。例えば、総合教育科目担当者による『論攷』の分冊化などにより研究成果の公表の機会が増加し、さらに大学院独立研究科としての言語コミュニケーション文化研究科開設の申請が目前に迫っています。

ところで、今回経済学関係以外の新たな研究誌の発行は、本学部開設65周年の記念事業として定例化している『経済学論究』特別号の編集過程において話題にのぼりました。当初の計画は、この65周年の記念事業として特別号を発行することでしたが、現在学部には設置されている宗教主事も加わった「学部21世紀構想委員会外国語教員部会」の提案と教授会の承認によって、この雑誌を独立した隔年発行の定期刊行物とすることに変更されました。

このような目的から創刊することとなった『エクス 言語文化論集』は、これまで経済学部所属の経済学以外の専門を専攻していた教員の退職記念号として不定期に公刊されてきた『文学語学論集』（第1号：1967年～第8号：1998）、『外国文化論集』（第1号：1995年、第2号：1999）の後継誌として位置づけられるものです。また雑誌名とした「エクス」は、「抽出物」（エクス）をあらわすと同時に、「ex = out of」すなわち「発信」を意味することから名付けられたものです。

今、経済学部は21世紀に向かってさまざまな改革に取り組もうとしてしています。研究の場であって、学問はその進歩のために学際化を求めてきました。さらに教育の場にあっても、学生の質の変容は、これまでのような狭義の専門だけを教授することを良しとしなくなっています。このような変化に対応するという消極的な動きとしてではなく、その変化を取り込み、新しい学問分野を切り拓くために、この雑誌が少しでも貢献できるようにすることを願っております。その意味でも、この雑誌がキリスト教科目および言語教育科目などの担当者だけのものとはならず、本誌の目的にかなう論文であれば、経済学を専門とする教員にも開かれた雑誌となり、『経済学論究』もまた、逆にそのように開かれた雑誌になることを願っています。

2000年2月末日

経済学部長

井 上 琢 智